

# 『經典』に学ぶ

## 妙法蓮華經如来神力品第二十一

### 經文

如来の滅後に於て。仏の所説の經の。因縁及び次第を知つて。義に随つて実の如く説かん。日月の光明の。能く諸の幽冥を除くが如く。斯の人世間に行じて。能く衆生の闇を滅し。無量の菩薩をして。畢竟して一乘に住せしめん。是の故に智あらん者。此の功德の利を聞いて。我が滅度の後に於て。斯の經を受持すべし。是の人仏道に於て。決定して疑あることなけん。

### 現代語訳

「如来が入滅したのちの世において、仏の説いた教えがどういう因縁で、どういう順序で説かれたかということをよく知り、教えの主旨にしたがって誤りなく人びとに説くならば、日月の光明がすべての暗黒を消滅させるように、人びとの心の迷いの闇を消し去り、無数の菩薩（信仰者）たちを必ず一仏乘へと導くでしょう。

よって、人生をほんとうに深く考える人（智慧を求める人）は、この教えの功德がすぐれていることを聞いたならば、如来の滅後において、この教えを受持するのが当然なのです。どうしても、この教え（真理・法）に帰着せざるを得ないのです。そうならば、その人が必ず仏道を成ずるであろうことは、もはや疑いもありません」

一乗 一乗とは一仏乘を略したものです。仏さまの教えには、声聞乘、縁覚乘、菩薩乘という三乘（三つの修行の道）があるように見えますが、それは最高真実の法へ導くための方便であり、最終到達点ではありません。すべての教えは、「一切衆生を仏の境地に導く」というただ一つの目的のために説かれています。三乗という、それぞれに違いがあるように見える道も、この一つの道につながっているのです。ですから、一仏乘とは、自分も他の人もすべてを仏の境地に導く最終的な道を意味します。

## 意味と受け止め方

### だいじんりき あら 大神力を現わす

この品までに私<sup>ほん</sup>たちは、すべてのいのちの大本<sup>わたし</sup>が久遠<sup>おおもと</sup>実成<sup>く おんじつじょう</sup>の本<sup>ほん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>（宇宙<sup>うちゅう</sup>の大<sup>だい</sup>生命<sup>せいめい</sup>）であり、私<sup>わたし</sup>たちのいのちの本質<sup>ほんしつ</sup>はこの肉体<sup>にくたい</sup>ではなく、仏性<sup>ぶつじょう</sup>（本<sup>ほん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>と同じいのちの働<sup>はたら</sup>き）であることをしっかりと心<sup>こころ</sup>に刻<sup>きざ</sup>み込<sup>こ</sup>んできました。私<sup>わたし</sup>たちは本<sup>ほん</sup>仏<sup>ぶつ</sup>と同じ永<sup>えい</sup>遠<sup>えん</sup>なる一つの大きないのちを<sup>ひと</sup>生<sup>お</sup>きています。

また、仏<sup>ほとけ</sup>さまと私<sup>わたし</sup>たちは親子<sup>おやこ</sup>の関係<sup>かんけい</sup>であり、親<sup>おや</sup>である仏<sup>ほとけ</sup>さまは、子<sup>こ</sup>どもを慈<sup>いつく</sup>しむあたたかな眼<sup>め</sup>で私<sup>わたし</sup>たち一人<sup>ひとり</sup>ひとりの成長<sup>せいちょう</sup>を見守<sup>みまも</sup>り、折<sup>おり</sup>にふれては、さまざま縁<sup>えん</sup>をとおして学<sup>まな</sup>びの場<sup>ば</sup>を与<sup>あた</sup>えてくださっていることを学<sup>まな</sup>びました。

この真<sup>しん</sup>実<sup>じつ</sup>に目<sup>め</sup>覚<sup>ざ</sup>めると、私<sup>わたし</sup>たちは自分<sup>じぶん</sup>のいのちも、他人<sup>たにん</sup>のいのちも等<sup>ひと</sup>しく尊<sup>とうと</sup>いものであることがわかり、表<sup>ひょう</sup>面<sup>めん</sup>上<sup>じょう</sup>の違<sup>ちが</sup>いを超<sup>こ</sup>えて、相<sup>あ</sup>い手<sup>て</sup>の仏<sup>ぶつ</sup>性<sup>じょう</sup>を拜<sup>おが</sup>ませただけようになります。そうなると、やがて人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>ばかりか、生<sup>い</sup>きとし生<sup>い</sup>けるものすべての存在<sup>そんざい</sup>が仏<sup>ほとけ</sup>さまの子<sup>こ</sup>・仏<sup>ぶつ</sup>性<sup>じょう</sup>であることに気<sup>き</sup>づくことができ、そこ<sup>そこ</sup>に大<sup>だい</sup>調<sup>ちよう</sup>和<sup>わ</sup>の世界<sup>せかい</sup>が開<sup>ひら</sup>けてきます。

こうした法<sup>ほ</sup>華<sup>け</sup>経<sup>きやう</sup>観<sup>かん</sup>を総<sup>そう</sup>まとめにしているのが如来<sup>にょらい</sup>神<sup>じん</sup>力<sup>りき</sup>品<sup>ほん</sup>です。

常<sup>じやう</sup>不<sup>ふ</sup>軽<sup>きやう</sup>菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>品<sup>ほん</sup>の最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>で釈<sup>しゃく</sup>尊<sup>そん</sup>は、「真<sup>ま</sup>心<sup>しん</sup>を込<sup>こ</sup>めて教<sup>きやう</sup>えを説<sup>と</sup>き広<sup>ひろ</sup>めれば、まわり道<sup>みち</sup>をすることなく仏<sup>ほとけ</sup>の悟<sup>さと</sup>りに達<sup>たつ</sup>することができるでしょう」とお説<sup>と</sup>きになられました。

この品<sup>ほん</sup>では、その言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>を受<sup>う</sup>けた大<sup>おお</sup>勢<sup>ぜい</sup>の菩<sup>ぼ</sup>薩<sup>さつ</sup>たち<sup>が</sup>が合<sup>がっ</sup>掌<sup>しょう</sup>しながら、「世<sup>せ</sup>尊<sup>そん</sup>、私<sup>わたし</sup>たちはこの世<sup>よ</sup>のあらゆる場<sup>ばしょ</sup>所<sup>じょ</sup>で、必<sup>かな</sup>ずこの経<sup>きやう</sup>を説<sup>と</sup>き広<sup>ひろ</sup>めます。真<sup>しん</sup>実<sup>じつ</sup>かつ清<sup>じやう</sup>浄<sup>じやう</sup>な大<sup>だい</sup>法<sup>ほう</sup>を得<sup>え</sup>ることができたからには、それを受<sup>じゆ</sup>持<sup>じ</sup>・読<sup>どく</sup>・誦<sup>じゆ</sup>・解<sup>げ</sup>説<sup>せつ</sup>・書<sup>しょ</sup>写<sup>しゃ</sup>して、この教<sup>おし</sup>えの恩<sup>おん</sup>にお報<sup>むく</sup>いしたいと思<sup>おも</sup>います」と誓<sup>ちか</sup>います。

すると釈<sup>しゃく</sup>尊<sup>そん</sup>は、舌<sup>した</sup>を天<sup>てん</sup>空<sup>くう</sup>高<sup>たか</sup>くのばしたり、全<sup>ぜん</sup>身<sup>しん</sup>から美<sup>うつく</sup>しい光<sup>ひかり</sup>を放<sup>はな</sup>ったり、地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>を振<sup>しん</sup>動<sup>どう</sup>させたりと、十<sup>じゆ</sup>種<sup>しゆ</sup>の不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>な大<sup>だい</sup>神<sup>じん</sup>力<sup>りき</sup>を現<sup>あら</sup>わされます。こうした神<sup>しん</sup>秘<sup>び</sup>的<sup>てき</sup>な現<sup>げん</sup>象<sup>じやう</sup>の一つ<sup>ひと</sup>は、仏<sup>ほとけ</sup>さまの大<sup>だい</sup>慈<sup>じ</sup>悲<sup>ひ</sup>心<sup>しん</sup>を象<sup>しやう</sup>徴<sup>ちやう</sup>するた<sup>た</sup>めに表<sup>ひやう</sup>現<sup>げん</sup>されたものですが、神<sup>じん</sup>力<sup>りき</sup>のなかでも、次<sup>つぎ</sup>に述<sup>す</sup>べる最<sup>さい</sup>後<sup>ご</sup>の神<sup>じん</sup>力<sup>りき</sup>は、私<sup>わたし</sup>たちが常<sup>つね</sup>に心<sup>こころ</sup>にとめておく必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>があります。

釈<sup>しゃく</sup>尊<sup>そん</sup>は神<sup>じん</sup>力<sup>りき</sup>によって、人<sup>ひと</sup>びとの目<sup>め</sup>に世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>がすべて一つの仏<sup>ほとけ</sup>の世界<sup>せかい</sup>になるさまを映<sup>うつ</sup>し出<sup>だ</sup>します（通<sup>つう</sup>一<sup>いつ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>土<sup>ど</sup>）。この神<sup>しん</sup>力<sup>りき</sup>には、「真<sup>ま</sup>理<sup>り</sup>はあくまでも一つであるから、未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>において、いつかはすべてのもの<sup>ひと</sup>が一つの真<sup>しん</sup>理<sup>り</sup>のレール<sup>の</sup>に乘<sup>かん</sup>り、完<sup>かん</sup>全<sup>ぜん</sup>な調<sup>ちよう</sup>和<sup>わ</sup>のある世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>をつくりあげることができる（未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>理<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>）」という意<sup>い</sup>味<sup>み</sup>が込<sup>こ</sup>められています。

地球上には、大小さまざまな国が存在しています。しかし、国や民族の違いを超えて、すべての人が宇宙の大生命という一つのいのちを生きているという自覚に立ち、真理・法にそった生き方をするならば、国境をめぐる紛争や民族間の争い、差別などはなくなり、世界の平和境（常寂光土）という大調和の世界をつくり出すことができます。

しかし、私たちが生活している現実の社会、世界を見まわしてみると、そのような大調和をなす世界が訪れることは夢のこのように思えます。それでも仏さまは、それは理想であると同時に、必ずそうなるという保証をしてくださっているのです。

## 理想は実現する

理想の境地は、はるか遠いもののように思えます。しかし、仏さまは、仏の教えを實踐することによって、一歩でも半歩でも近づけるんだと、保証してくださっているのです。この仏さまご自身のお言葉を、私たちはおろそかにしてはなりません。なぜならば、理想に向かって歩むという道筋がしっかりと決まれば、私たちの人生にほんとうの意味での生きがい生まれるからです。そして、人生に揺るぎない一本の線が貫かれ、日々の生活に大きな安心感を得ることができるのです。

もちろん、私たちはときには過ちをおかしたり、怠け心を起こしたり、小さなことに思い悩んだり、いろいろな迷いをくり返しています。しかし、迷いのくり返しの中にも、一歩一歩、理想の世界をめざして進んでいるんだという自覚があれば、多少、右や左に揺れても、常に軌道修正ができるため、決してわき道へそれることはありません。

開祖さまは、宗教・宗派、教義などが異なる宗教者が行動をとるに際して宗教協力など絶対に不可能であるといわれていた1960年代から、「世界の宗教者が世界平和という大きな目標に向かって手をつなぐことが大切だ」と訴えられ、自ら率先して行動を起こし、ついには世界宗教者平和会議（WCRP）を創設されました。WCRPは、いまやNGO（非政府組織）のなかでも、国連の経済社会理事会の総合協議資格を与えられ、世界各地で紛争や貧困、軍縮などの問題解決に向けて活躍しています。

開祖さまは、理想は必ず実現できるという仏さまのお言葉を確信していたからこそ、この偉業を成し遂げられたのではないのでしょうか。

私たちも、自らの成長・向上の旅の向こうに、「仏の境地を得る」というはっきりとした目標を確立し、一歩ずつ着実に歩めば、毎日を有意義に意欲的に生きる

ことができます。そして、<sup>おお</sup>多くの<sup>ひと</sup>人にも<sup>にんげん</sup>人間の<sup>い</sup>生きる<sup>しん</sup>真の<sup>もくてき</sup>目的に<sup>めざ</sup>目覚めて<sup>ただけ</sup>いただける  
ような<sup>えん</sup>縁になっ<sup>り</sup>てい<sup>り</sup>ければ、<sup>だいちょうわ</sup>やがては<sup>せかい</sup>理想である<sup>かなら</sup>大調和の<sup>げんじつ</sup>世界が、<sup>必ず</sup>必ずや<sup>げんじつ</sup>現実のものとな  
ります。<sup>ほとけ</sup>仏<sup>おし</sup>さまの<sup>じっせん</sup>教えを<sup>ふかのう</sup>実践すれば、<sup>不可能</sup>不可能はないのです。

この<sup>ほん</sup>品の<sup>お</sup>終わりで<sup>しゃくそん</sup>釈尊は、<sup>ほとけ</sup>仏の<sup>ねが</sup>願いと<sup>おし</sup>教えに<sup>おこ</sup>そった<sup>ひと</sup>行ない<sup>ひと</sup>をする<sup>ほとけ</sup>人には、<sup>みち</sup>人を<sup>みちび</sup>仏の<sup>じゆうじざい</sup>道に<sup>ちから</sup>導く<sup>くどく</sup>自由自在の<sup>え</sup>力と<sup>と</sup>すばらしい<sup>きょうてん</sup>功德が<sup>ばっすい</sup>得られると<sup>と</sup>説かれます。『<sup>きょうてん</sup>經典』に<sup>しゃくそん</sup>抜粋  
されている<sup>きょうもん</sup>経文は、<sup>せっぽう</sup>その<sup>つづ</sup>説法に<sup>かた</sup>続いて<sup>さいご</sup>語られた<sup>ぶぶん</sup>最後の<sup>きょうもん</sup>部分です。<sup>しゃくそん</sup>経文にある<sup>ことば</sup>釈尊の<sup>わたし</sup>お言葉を、「<sup>ひとり</sup>私<sup>ちよくせつかた</sup>たち一人<sup>ひとり</sup>ひとりに<sup>ちよくせつかた</sup>直接<sup>ことば</sup>語りかけて<sup>う</sup>くださっている<sup>う</sup>んだ」と<sup>こころ</sup>心から<sup>う</sup>受け  
とめるとき、<sup>しゅぎょう</sup>修行への<sup>かぎ</sup>限りない<sup>ゆうき</sup>勇気が<sup>う</sup>わいてくる<sup>う</sup>ことでしょう。

## 事例から学ぶ

<sup>じれいへん</sup>事例編では、<sup>かくほん</sup>各品に<sup>こ</sup>込められた<sup>おし</sup>教えを、<sup>わたし</sup>私<sup>ひび</sup>たちが<sup>せいかつ</sup>日々の<sup>せいかつ</sup>生活の<sup>なか</sup>なかで、<sup>い</sup>どのように  
生かして<sup>い</sup>いければ<sup>い</sup>よいかを、<sup>ぐたいてき</sup>具体的な<sup>じれい</sup>事例を<sup>かんが</sup>とおして<sup>かんが</sup>考えて<sup>い</sup>いきます。

### 鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん（75）... 佼成会の青年部活動も経験している信仰二代目会員

アキオさん（45）... 一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん（38）... 婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん（16）... やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん（9）... 元気いっぱいの小学三年生

## ばくにもできる

<sup>にちようび</sup>日曜日の<sup>ごご</sup>午後、<sup>きょうかいどうじょう</sup>教会道場で<sup>おこ</sup>行なわれていた<sup>しょうねんぶ</sup>少年部の<sup>いっばくれんせい</sup>一泊練成から、<sup>しょうがくよねんせい</sup>小学四年生の<sup>げんき</sup>ヒロシくんが<sup>かえ</sup>元気に<sup>かえ</sup>帰ってきました。

いつもは<sup>そと</sup>外から<sup>もど</sup>戻ると<sup>て</sup>手も<sup>あら</sup>洗わず、<sup>ま</sup>真っ<sup>さき</sup>先に「<sup>だいどころ</sup>おやつある？」と<sup>だいどころ</sup>台所に<sup>かえ</sup>やってくる  
ヒロシくんが、<sup>かえ</sup>きょうは「<sup>ほうぜん</sup>ただいま<sup>て</sup>帰って<sup>あ</sup>まいりました」と<sup>あ</sup>ご<sup>あ</sup>宝前に<sup>あ</sup>手を<sup>あ</sup>合わせてい  
ます。<sup>ふ</sup>振り向いた<sup>む</sup>ヒロシくんの<sup>かお</sup>顔は、<sup>なん</sup>何だか<sup>とくい</sup>とても<sup>とくい</sup>得意<sup>とくい</sup>そう。

<sup>ははおや</sup>母親の<sup>ははおや</sup>タカエさんは <sup>どうしたのかしら？</sup> どうしたのかしら？ <sup>あたま</sup>といぶかりながらも、<sup>あたま</sup>ヒロシくんの<sup>あたま</sup>頭

をなでて聞きました。

「偉いじゃない。ヒロシがご宝前に手を合わせるなんて、滅多にないものね。教会で、何かいいことでもあったの？」

するとヒロシくんは、胸を大きくそらし、鼻の穴をいくぶんふくらませながら言いました。

「うちでは毎週土曜日のお昼に、一食運動をやっているでしょう。教会で少年部長さんから一食とユニセフの話があったときにその話をしたんだ。そうしたら、少年部長さんや友達からとてもほめられちゃった」

「よかったじゃない。ヒロシはときどき、『おなかすいた。きょうは一食しなくてもいいよね』って言うけど、一食をきちんと続けてきてよかったでしょう？」

「うん。そうでなかったら、みんなの前で偉そうに言えなかったからね。ぼくは一食をして、お小遣いのなかから50円ずつしか募金箱に入れられないけど、それでも少年部長さんは『貧しい人たちの力になったり、世界平和のために力を尽くすことに大人も子どももありません。自分にできることから始めることが大事なんです。ヒロシくんの活動は、絶対に世界の人たちの役に立っていますよ』って言ってくれたんだ」

「そうよ。ヒロシも世界平和のために十分役立っているのよ」

「そうなんだよねえ。ぼくは世界を平和にするために、もっとたくさんよいことをするよ」

## 心を清める

翌朝のことでした。ヒロシくんと姉のケイコさんが何か言い争っています。

そのうちに「さっさとケイコさんは学校に行ってしまいました。

ヒロシくんは半ベそをかきながら、台所にいるタカエさんのところに来て訴えました。

「お母さん。お姉ちゃんったら、ぼくがきのう教会でもらってきたジュースを一人で飲んじゃったんだよ」

「まあ、それは残念だったわねえ。お姉ちゃんは何て言っていた？」

「のどが渴いて、ほかに飲むものがなかったから飲んだって。学校の帰りに同じジュースを買ってくるからいいでしょって言っていたけど、そういう問題じゃないよね？」

「お姉ちゃんは、よっぽどのどが渴いていたんでしょう。牛乳も麦茶もなかったか

ら」

「じゃあ、水道の水を飲めばいいのに。頭にきちゃうよ。そうだ、冷蔵庫にあるお姉ちゃんのフルーツゼリーを、ぼくが食べちゃってもいいよね。仕返しだ」

ヒロシくんはそう言うと、素早く冷蔵庫をあけてゼリーを取り出し、一気に食べてしまいました。

タカエさんは、黙ってその姿を見ていました。そして、ヒロシくんが食べ終わるのを待ってから、ゆっくりとした口調で言いました。

「どう、おいしかった？」

「……………」

「きのうヒロシは『世界平和のためにぼくができることは、何でもやるよ』ってお母さんに言ったわよね。それなのに、こんなことをしてもいいのかしら？」

「世界平和と、お姉ちゃんへの仕返しとは関係ないじゃないか」

「ううん、大きな関係があるのよ。たとえば、お金は寄付するけど、人をだましたり、傷つけたり、苦しませてばかりいる人がいたとするわね。ヒロシは、そういう人たちがたくさんいても、世界は平和になると思う？」

「うーん。いい世の中にはならない」

「世界がほんとうの意味で平和になるためには、一人ひとりが自己中心、たとえば怒りや必要以上に欲しがる心などをあらためて、人にやさしく、親切にできる人間になることが大事なの。平和活動をしていても、その人の心がきれいになっていかなければ、その活動はうわべだけのものだから、長続きはしないでしょうね。よい行ないは、行なう人の心も清めていかないと、人をほんとうに救う力にはならないのよ」

「それがぼくと、どう関係あるの？」

「ヒロシは人に何かされたら、仕返しをしてもいいと思っているんでしょう？」

「それは……………」

「仕返しをしたいというのは、心のなかで怒りで真っ黒になっているからじゃないかしら。人の意見を聞いたり、相手を理解し、許すという心 言葉を換えれば、清らかな心を育てていくことが、世界を平和にするということなのよ」

「ぼくは……………。学校から帰ってきたら、お姉ちゃんのゼリーを買いに行くよ」

「わかってくれたのね。うれしいわ。ゼリーは、お母さんが買っておくから大丈夫。だけど、お姉ちゃんに謝るのよ」

「うん。ちゃんと謝るよ」